

インタビュー

大谷敏之（おおや・としゆき）
1959年1月3日東京生まれ。大学卒業後 広告代理店勤務。その後、モータースポーツ専門の広告代理店を前三栄書房社長と設立。1994年SUPER GT立ちあげから関わる。2008年TOKYO DRIFT企画すると同時にドリフト競技に觸わり今日に至り、9年目。2009年D1GPアメリカシリーズ、2012年からD1GPタイシリーズ等を現地プロモーターと企画実施。2016年はロシア以外に、D1GP CHINA DRIFTシリーズ（年4大会開催）を中国全土で開催予定。環太平洋シリーズ（D1GP ASIAN PACIFIC SERIES）擁立を現在企画中。

株式会社 サンプロス D1 事業部 本部長 大谷敏之氏

日本発、ドリフト競技をロシアに

ウラジオストク空港の近くにあるサーキット「プリムリング」で、タイヤを滑らせながら走るドリフト走行の国際大会「D1 PRIMRING GP」が2014年から2年連続で開かれている。大会のライセンスを持つのは日本の株式会社サンプロス（東京・新宿）。同社営業企画プロモーション部・海外事業部の大谷敏之本部長に、これまでの経緯と今後の見通しを聞いた。

ビタリー氏への信頼

— 東京・お台場などで行われる「D1 GRAND PRIX（ディーワングランプリ）」がロシアで開かれたのは、どんな経緯があったのですか。

きっかけは2011年にビタリー・ベルケエンコさんと知り合ったことです。ウラジオストクの、SUMOTORI Machinery Group（創立1998年8月）の代表として、自動車並びに建設機械の輸入・販売関係の仕事を幅広く手がけている方ですね。当時、この方がウラジオ近郊に「プリムリング」というサーキットをつくろうとしていて、そのコンテンツを必要としている。共通の知り合いを通じて連絡がありまして、都内でお会いしました。その後我々がお台場でイベントをやるときに足を運ばれて、そこでプリムリングのコースレイアウト図を見せてもらって、ここの場合でドリフトができるできないみたいな相談をもちかけられました。その後も年2回はお会いしていて、何回か話し合いを重ねましたが、なかなか実現のタイミングに至らなかったんです。出会いから2年ほど経ったとき、大会の規模

と予算感を提示されこれでは是非やりたいとビタリーさんが言ってこられて、都内で2人で打ち合わせをしました。そこからはトントン拍子でした。具体的に契約書を作つてサインしたのが2014年の6月。その後の9月にウラジオストクで第1回目の大会を実施しました。大会は3年契約で、今年が契約の最終年になります。ちなみに昨秋の第2回目の大会は、会場満杯で延べ計約1万5000人が来場、スポンサーも第1回目大会より増えました。

— SUMOTORIのビタリー社長からの要請を受けて進出されたのですね。

ビタリーさんは、日本のモータースポーツコンテンツをいくつかウラジオストクに持ち込みたいと考えていました。今、我々のイベントをウラジオストクでできているのは彼のおかげです。性格は誠実で真面目。本当に親日家で、「わびさび」についてもきちんと語つたりするくらいの方です。日本文化が好きで、社名も「相撲取り」から来ているんですね。我々もロシアの方と仕事をするのは初めてだったので、まあ人となりはわかっていましたけど、実際に彼の会社にお

邪魔したら、大手自動車メーカー8社をすらりと扱っていて、日本との取引も多い。此人なら安心できるなど確信したのです。

— ロシアにはドリフト競技のファンが多いと聞きます。

調べると、ロシアでもドリフト競技は盛んに行われています。RDS、ロシアン・ドリフト・シリーズというのがあるんですね。広い国土を4分割して各地域で大会をやつていて、その全国統一大会がシベリアのクラスノヤルスクで行われたり。我々のD1はドリフト競技のバイオニアですからみなさん知つてくださつていて、我々はそういう意味でウラジオストクに招かれたのだと思っています。

「環太平洋シリーズ」創設の夢

— 御社はどのような位置づけですか。

ウラジオストクのD1が日本のニュースで取り上げられるときに当社の社名は出なかつたかもしれません、我々サンプロスは、D1の権利を持っている会社です。三栄書房グループの映像会社なのですが、2000年に、何か面白い映像コンテンツがないかと考えて、ドリフト走法を競技にできないかということで始ました。街で暴走行為をしているとか、峠を走つて若者たちを集めてきて、暴走行為はダメだ、ちゃんと僕たちが場所を用意してルールに従つて競技をする事で君たちを有名にしてあげる。そういう競技を今から始めよう！と。そしてセルビデオ（Video OPTION）を製作したら、爆発的に売れた。その映像が国内だけでなく世界中に回つて、今や、見よう見まねを含めると40ヶ国でドリフト競技が開催されるようなところまで発展したのです。今もドリフトのイベント映像はサンプロスがつくっています。サンプロスにはD1事業部と映像事業部とがつて、我々はD1という興業をやる部門として国内外で働いているわけです。

— 各国で自主的にドリフト競技が立ち上がる中、本家元の「D1」は海外展開してきたのですか。

今、我々が海外に出向いて行く先は、1つがロシアで年に1回。それからタイです。タイは実は2012年から2014年の3年契約だったのですが、1年目、2年目とやって、3年目はクーデターが起きて話が止まってしまいました。みんな待ち望んでいたのでなんとか再開したいとは思つてはいるんですけどね。また、今年から中国シリーズが加わります。

日本自動車連盟（JAF）があつてその上に国際自動車連盟（FIA）があるんですけど、この中にドリフトの部会があります。将来、2017年以降だと思いますが、ドリフトのワールドシリーズが行われる見通しです。我々はそれも視野に入れて、環太平洋、アジア・パシフィックのシリーズをやりたいと考えています。ロシアも中国も東南アジアもオー

満員の観客で盛り上がるウラジオストクのプリムリング。昨年9月18～20日に開催された「ASIA PACIFIC D1 PRIMRING GRAND PRIX」より。



ストラリア、ニュージーランドそしてアメリカを含めて、まず環太平洋シリーズをつくりたくて、既にロシア・中国・タイそして日本があるというわけです。

— 環太平洋シリーズをめざしておられるということは、ビタリーさんと会う前からロシアで開催しようしていたのですか。

ロシアは国が広すぎることもあって、どこにどう働きかけたらいいのかまったくわからませんでした。タイならバンコクの、三栄書房とも関係のあるメディア会社（インスペイア社）が招聘してくれたのですが、そういうつなぎ役がないとなかなか難しいですよね。アメリカでもフォーミュラDというドリフト競技のシリーズがあつて連絡も取れます。ロシアは、RDSというのがあるとは聞いていたけれどモスクワに行かなきやいけないんだろうな、という程度で、国を4つに分けて競技をやっているとか詳しく知るようになったのはビタリーさんと会つてからのことでした。

— 海外、例えばウラジオでD1をやる場合、ビジネスとして見ればどんな構図になるのでしょうか。

地元のビタリーさんたちはイベントをやつて、観客からの入場料やスポンサーからの協賛金などを収入として得ます。我々はビタリーさんたちから契約料をいただいて、D1という名前を使ってイベントをやることに対するライセンスをお渡しします。そしてこのライセンスは売るのではなくて賃貸契約のようなものですよ。あまりビジネスライクになりすぎてもいけないけど赤字になつてもいけない。最低限の利益は必要ですが、我々としてはビタリーさんの思いを叶えるという部分もありますし、大儲けするような額ではやっていませんよ。

この続きは、「月刊ロシア通信」
紙版・2016年3月号でお読み頂けます。
ご購入は→<http://jsn.theshop.jp/>